

近世日朝関係と江戸幕府・対馬宗家

古川, 祐貴

<http://hdl.handle.net/2324/4475220>

出版情報：九州大学, 2020, 博士（文学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名 : 古川 祐貴

論 文 名 : 近世日朝関係と江戸幕府・対馬宗家

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

近世日朝関係に関する研究は、①江戸幕府が朝鮮王朝に対して担った対朝鮮外交、②対馬宗家が朝鮮王朝に対して担った朝鮮通交（外交・貿易）という 2 つの分析視角に基づいてなされてきた。これらは対極に朝鮮王朝を想定するという意味においては、王道とも言える分析視角であるが、基礎となる江戸幕府―対馬宗家関係が明らかにされていない、といった問題がある。対馬宗家は幕府による貨幣改鋳（1695 年～）の影響で、藩財政の根幹とも言うべき朝鮮貿易が危機的状況に陥り、18 世紀以降、幕府に対する“依存度”を強めていく。それは実現した請願（対幕府交渉）の数から測り得るが、対馬宗家がどのようなかたちで“依存度”を強めていったのかについては分かっていない。本研究は対馬宗家がいかにして多くの請願（対幕府交渉）を実現していったのかを明らかにするとともに、幕府―対馬宗家関係が近世日朝関係を構成する第三の分析視角たり得ることをも証明しようとするものである。

その前提としてまず考えておかなければならないことは、幕府の対朝鮮姿勢であろう。幕府の対朝鮮姿勢についてはこれまでも朝鮮観と絡めたかたちでの議論がなされ、幕府が日朝関係の維持を最優先する向きがあったことが指摘されている。しかし、根拠とされたのは、竹島問題、漂流・漂着事件、朝鮮通信使であり、いわば「ハレ（非日常）」に属する事案である。「武威」を放棄した幕府が日朝関係の維持に努めるのは当然のことであり、このように考えると幕府の対朝鮮姿勢を見るのに「ハレ（非日常）」の事案は適さないことになる。「ケ（日常）」の事案を見てこそ通常の対朝鮮姿勢が分かるというものであろう。そのため第 1 部「江戸幕府の対朝鮮姿勢」では、幕府が朝鮮国王に対して作成した徳川将軍国書・別幅（第 1 章）、対馬宗家の朝鮮通交（外交・貿易）に係る相談を受け付けるために幕府内に設置された朝鮮御用老中（第 2 章）の二つを取り上げ、幕府が朝鮮通交（外交・貿易）に関して無知・無関心とでも言うべき態度を取っていた事実を明らかにした。

第 2 部「対馬宗家の朝鮮通交（外交・貿易）論」では、対馬宗家が 17 世紀末期～18 世紀初期に行った朝鮮通交（外交・貿易）の「改変」について論じた。朝鮮通交（外交・貿易）は、

江戸時代初期より幕府から命じられるものとして認識され、対馬宗家も中世以来のこととして無自覚的にそれを担ってきた節がある。しかし、朝鮮通交（外交・貿易）に対する幕府の軽い扱いに直面した対馬宗家は、その慣行を逆手に取り始める。具体的には、若年（幼少）では朝鮮通交（外交・貿易）には任命されず（第3章）、朝鮮通交（外交・貿易）を命じられなければ、幕府宛て起請文を提出したり（第4章）、朝鮮から対馬藩主図書を受領したりすることもできないこと（第5章）、である。対馬宗家はこうした自らの手足を縛るかのような「改変」を自主的に行っていくことで、朝鮮通交（外交・貿易）が誰もが担うことのできない重要なものであることをアピールするとともに、日朝関係自体、幕府の命令によってでしか成り立ち得ないということをも主張しようとしたと考えられる。

第3部「対馬宗家の請願（対幕府交渉）」では、18世紀以降、本格的に展開された請願（対幕府交渉）を取り上げた。対馬宗家の請願（対幕府交渉）に関してはこれまでも18世紀中～末期を中心に検討が進められてきたが、要ともなった自己認識（由緒）＝「藩屏」「朝鮮押えの役」がいつどのようなタイミングで出現していたのかが分かっていなかった。第3部では対馬宗家が行った請願（対幕府交渉）の中でも初期のものに注目し、「藩屏」や「朝鮮押えの役」の初見について考察した。結果、「藩屏」は“明清交替”（1644～83年）を直接的な契機として出現しながらも、その後の「公儀」を標榜する幕府の意向に沿うかたちで頻繁に請願（対幕府交渉）に使用される言葉となっていったこと（第6章）、また「朝鮮押えの役」については、正徳度信使（1711年）費用拝借（第7章）の舞台裏で行われていた請願（対幕府交渉）の中で出現した「朝鮮之押」を起源とする言葉であったこと（第8章）、が明らかとなった。

以上の検討から対馬宗家は、幕府が朝鮮通交（外交・貿易）に関して無知・無関心であったこと（第1部）を利用して、朝鮮通交（外交・貿易）の任命権者としての“自覚”を幕府に植え付けるとともに（第2部）、「藩屏」や「朝鮮之押」といった自己認識（由緒）を創出して（第3部）、それを“役儀化”して訴えていくことで（「藩屏」の「役」論、「朝鮮押えの役」）、長らく請願（対幕府交渉）を実現していったと考えられる。そして、こうした「藩屏」や「朝鮮之押」が“役儀化”され、対馬宗家内で「役」と認識されていった過程こそがまさに、朝鮮通交（外交・貿易）の「家業」から「家役」への転換の過程でもあったことを指摘した。